

「苗も人も育てる」 ガザの農業事業

農家の多くも食糧援助に頼っているという状況を知って、「ガザの子どもたちを飢えさせないために」というコンセプトのもと開始した農業事業。「種子バンク」(自家採種)から始めた農業支援が、人材育成と苗作りを中心とした本格的な事業に拡大してもうすぐ一年になります。この農業支援の様子を種子バンクの立ち上げから関わっている現地駐在員が報告します。



[写真左] オリーブのさし木を説明するワリードさん

[写真上] 育てた苗を畑に植える

[写真下] 研修には少人数講義もある

「バラディ」

「在来種」を育てる。それは単に品種の確保というだけでなく、在来種で実ったもののほうが値段は高いけれどおいしくて人気があるというニーズにも基づいています。在来の作物を「バラディ」と呼んで、みな口々にバラディの味の良さを話します。「形は不揃いだけど、味は断然おいしい」と。しかし在来種は作付けから収穫までに時間を要するので、短期間で高収量が見込める「ハイブリッド」を農家を選びたがるのも仕方ありません。そのような中で在来種の良さを再認識してもらい、種子をつくることで広めていこう、と2009年12月に開始した「種子バンク」事業。そこで収穫された種子を使って

2011年3月からは人材と苗を育てる取り組みも始まり、事業は順調に進んでいます。

この事業では現地スタッフに恵まれたことが成果に反映していると実感しています。現地マネージャーのニメルさんはガザで最初の農業普及員で、昔は視察や研修でイスラエルに何度も足を運んだことがあり、ヨルダン川西岸地区の農業関係者とも旧知の仲です。「ニメルが関わっているなら君のところの事業は安泰だよ。彼は本当の専門家だ」と言われます。

人脈と経験のあるニメルさんは、事業の柱である研修と育苗の運営を日々現場で担っています。また「手を動かしてこそ農業技術者」という私たちと共通の考えを持ち、それを実践しています。例えば、若手農業

技術者向けの研修で予定していた講師が急に来られなくなりニメルさんが講師を務めるときがあります。農場で実習を行えば、「自分の手を使って作業しなければ身につかない。汚れることを嫌う人が農民に良い指導はできない」と言い、積極的に20人の研修生に実践させます。

あるとき露地で「ドリップ灌漑(水をばら撒くのではなく、ホースの小さな穴から適度な水を出す)」の適切な設置方法を指導し、その後レタスやキャベツ、豆類等の苗を作付しました。研修生は作物の種類によって作付間隔を考えて、実際に植えます。腰を伸ばして休憩している若い研修生に、ニメルさんが「体がなまってるぞ!」と鞭を飛ばしていました。

演習農場が侵攻で破壊されて大学



グリーンハウスで育てた玉ねぎの苗。戦争被害の大きな農家などに配布する



ニメルさん(中央右)はレストランで出てくるオリーブの実をみただけで、その品種が分かる

農学部ではほとんど実践経験を持ってなかった研修生たちは、積極的に実技に参加しています。4月から共に勉強している研修生たちには笑いが絶えません。

「現場を大切に」

事業コーディネーターのワリードさんは実家が育苗をしていることもあり、実技のスキルも専門性があります。ニメルさんという農業技術者の模範がすぐ近くにおいて、彼の元で研修のモニタリングや農場の育苗施設運営に携わっています。若手農業技術者だけでなく、農家向けの研修も彼が日々足を運んで講師との調整、研修内容、研修生の出席の確認等を行っています。

農家向け研修は北部・中部・南部の3地域から各20名ずつを対象に実施しており、研修生についてはワリードさんに聞けば何でもわかるというほど把握しています。第2期の農家研修では、参加している研修生の多くが農家の息子・娘の若い世代で、同世代のワリードさんから積極的に情報を聞くなどスタッフと研修生の関係も深まりました。ワリードさん自身も、自分が住む北部とは違うガザの南部や中部で農民が抱える問題や農家の状況を以前より身近に理解し始めました。

私たちは事業を展開する中で現場

訪問（アウトリーチ）を重視しています。これは日本人スタッフも現地スタッフも同じです。足を運んで人に会い、現場を見て、話を聞く。そこから得られる情報を事業内容に反映させていく。研修生の畑を見に行けば、「せっかく来たのだから家にあがって」と言われ、甘い紅茶やアラビヤコーヒーを飲みながら世間話をする。この何気ない世間話から多くの貴重な情報が手に入ることも少なくありません。

最初の一年は事業を軌道に乗せ、必要な運營業務を日々こなすことに時間を要しましたが、その過程で「人の繋がり・関係性」が深まっていく

のが目に見えてわかりました。二年目以降は育苗と配布が本格化し、家庭排水の再利用も新たな要素として加わります。一年目で築いた事業を担う「人」という土壌で「人材が育つ」のが楽しみです。



農家向け研修の終了式

研修に参加している農家の話 モハンマドさん(33歳)



農家は伝統的な手法を用いていても、なぜそうしているのかわからないことがあります。

このあたりは水の塩分濃度が高いので、塩に強い作物、たとえばトマトを植えることが多いのですが、トマトを植えたら次のシーズンには別の野菜を植えることが普通です。親から経験的にそうしたやり方を教わったのですが、今日の講義でなぜかが科学的にわかりました。輪作が必要だったからです。伝統的な手法と科学的な知識が合体した感じです。

2008年末の戦争前は11ドノム(約1ヘクタール)の土地を耕作していましたが、戦争によって破壊されてしまい、6ドノムの土地を借りて農業を再開しました。戦車は水の主要なパイプを破壊し、修理には長い時間がかかってしばらく耕作できませんでした。必要な支援が得られず、3年経っても修復できずにそのままになっている農家もあります。戦車の「わだち」のあとは土壌が押し固められてしまい、数シーズンの間は作物がうまく育ちませんでした。私の土地から「立入禁止区域」までは3kmぐらい離れていますが、安全な場所などありません。温室、家、樹木、送電鉄塔。農家はみんな影響を受けていますよ。